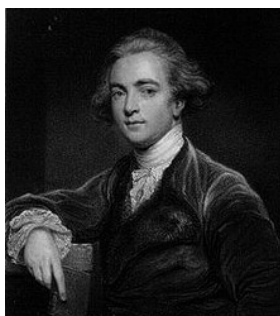


音の法則

窪蘭晴夫 Haruo KUBOZONO (国立国語研究所)

多言語間の類似性と対応関係

言語学者が「音」に魅せられる理由の一つに、言語音の現象が示す規則性をあげることができる。



ウィリアム・ジョーンズ (William Jones, 1746-1794)

近代言語学の基となった歴史比較言語学は、18世紀末にウィリアム・ジョーンズというイギリス人が、インドの古典語であるサンスクリット語（梵語）とヨーロッパの古典語であるギリシャ語・ラテン語との間に、音の類似性・対応関係があることを発見したことが発端となった。後に歴史比較言語学と呼ばれる学問分野の始まりであり、インド・ヨーロッパ語族と呼ばれる言語グループの発見である。

る。

この研究の中から、有名な「ゲリムの法則」も発見された。これはイタリア語やスペイン語の祖先であるラテン語と、英語やドイツ語などの祖先であるゲルマン語との間に規則的な音対応が見られるというものであり、筆者も高校時代にこの音の法則を学び、たとえばラテン語のpと英語のfの音が対応する (pedal—foot, pater—father) という事実に感動、興奮

したので覚えている（窪蘭、2008）。

方言の中で見られる規則性

同じような音の法則は日本語の中にも数多く存在している。たとえば方言間のアクセントを比較すると、東京方言のアクセントと鹿児島方言のアクセントはほぼ逆のパターンとなる。たとえば東京で高低と発音される単語（雨、春、秋、来る……）の多くは鹿児島では低

高のアクセントで発音され、逆に東京で低高となる単語（鮎、夏、冬、行く……）は鹿児島では高低のアクセントで発音される（窪蘭、2006）。このようなアクセントの対応関係は数多くの方言間で観察されており、方言間の歴史的関係や距離を測る指標ともなっている。

音の規則性は同一方言の中でも観察される。たとえば近畿方言の

方言比較

◆近畿方言（式保存の法則）			
はる、あき	→	はるやすみ、あきやすみ	
なつ、ふゆ	→	なつやすみ、ふゆやすみ	
◆鹿児島方言（複合法則）			
はる、あき	→	はるやすみ、あきやすみ	
なつ、ふゆ	→	なつやすみ、ふゆやすみ	
◆鹿児島県・甕島方言（複合法則）			
はる、あき	→	はるやすみ、あきやすみ	
なつ、ふゆ	→	なつやすみ、ふゆやすみ	

複合語には「式保存」と呼ばれる法則が存在し、「春」や「秋」のように出だしが低く始まる語を前部要素とする複合語は低く始まり、「夏」や「冬」のように出だしが高い語で始まる複合語は高く始まる。複合語の最初の要素のアクセントが、複合語全体のアクセントを決定するのである。「春休み、秋休み」と「夏休み、冬休み」の発音の違いはこのような規則によって生み出されている。

イブ（B型）とその一つ前の音節が高いタイプ（A型）の二つのアクセント型があるが、A型の要素で始まる複合語は語末から二つ目の音節が高くなり、B型の要素で始まる複合語は語末音節が高く発音される。複合語が前部要素のアクセントを継承するというこの「複合法則」（平山の法則）は、九州西南部に広く観察されるアクセント規則である（平山、1951・本部、2000）。

なっているように見えるが、前部要素（春、夏）のアクセント特徴を継承するという点では同じ法則に支配されている。これらの方言に共通する法則が、歴史的にどのように発達してきたのか、この法則をもたない方言との境界がどこにあるのか、この法則が共時的にどのような例外を許すのか等々、興味は尽きない。

参考文献

- 平山輝男、1951年『九州方言音調の研究』学界の指針社。
 本部暢子、2000年『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版。
 窪蘭晴夫、2006年『アクセントの法則』岩波科学ライブラリー118。岩波書店。
 窪蘭晴夫、2008年『神様の手帳をのぞく』大津由紀雄編『ことばの宇宙への旅立ち』73～109頁、ひつじ書房。

ことばの歴史や発達に深く関わる音の規則性

この式保存の法則が、九州の方言でもやや形を変えて残っている。鹿児島方言には語末音節が高いタ

近畿方言の「春休み、夏休み」と鹿児島方言や甕島方言の「春休み、夏休み」は発音がまったく異





島根県隠岐の島町の世界ジオパーク認定を目指すまちづくりの取り組み

記念フォーラム「神々の舞い降りし島」自然と文化の再発見」

山 泰幸 Yoshiyuki YAMA

(関西学院大学人間福祉学部)

住民自らの価値を再発見

連携研究「自然と文化」小松班では、島根県が平成22年から3カ年の計画で実施している古事記編纂1300年記念事業の一環として、平成23年2月20日(日)に、島根県隠岐の島町において開催された記念フォーラム「神々の舞い降りし島」自然と文化の再発見」に共催者として参加した。主催は地元のみちづくりNPO風待ち海道倶楽部、後援は隠岐ジオパーク推進協議会、隠岐の島町教育委員会であった。

隠岐の島町では、数年前より、地形地質・植生において特異な隠岐の自然環境と、このような自然環境において繰り広げられてきた歴史や伝

統文化を、地元の有志が調査研究し、その価値を再発見する過程で、島に対する関心と自信を深めていき、住民と役場が一体となった熱心なまちづくりの活動をしている。現在、世界ジオパーク認定を目指して、隠岐諸島をあげて取り組んでいる。以上のように、研究課題「自然と文化」というテーマと重なる取り組み



写真1 小松和彦教授



写真2 基調講演の聴衆



写真3 飯倉義之研究員

みをしている隠岐を、小松班の研究メンバーの共通のフィールドとして、あるいは対話の舞台として設定しようという意図で、現地研究会を兼ねてフォーラムを共催することになった。なお、フォーラムのコーディネーターは、小松班のメンバーで、隠岐をフィールドとしている筆者が行った。

日本神話をめぐる2つの講演

フォーラムは3部構成で行われ、第1部では、2つの基調講演があった。

まず、小松和彦国際日本文化研究センター教授からは、「比較神話学からみた古事記」と題して、比較神話学・文化史的民族学の成果をもとに、日本神話の世界的な位置づけが紹介された。また、古事記に記載されている説話には、律令国家の政治性に回収されないエピソードがあること、高知県旧物部村(現、香美市)の



写真4 記念フォーラムの様子(左端は筆者)

のいざなぎ流の祭文のなかにも神話的説話があることが指摘され、多角的な観点から古事記や日本神話を捉える必要性が説かれた。

次に、韓国における古事記研究の第一人者の魯成煥韓国蔚山大学教授からは、「日本因幡と韓国梧桐島の白兎説話」と題する講演があった。アジアにおける白兎説話のバリエーションを、構造的な観点から兎と水中動物との関係に注目し、東南アジア系と東北アジア系の2つの類型に分類。さらにベトナム、韓国、中国の説話との共通点と差異が抽出され、韓国の梧桐島の白兎説話が日本に伝播したのではないかという興味深い説が披露された。

多方面から隠岐の自然と文化を探索

第2部では、隠岐の島町から八幡浩二氏が「隠岐の自然と文化」と題して、地質地形から見た隠岐の歴史と植生について紹介があり、特に隠岐産の黒曜石とその石器について詳しい紹介があった。

村上和弘愛媛大学准教授からは、「対馬の自然と文化」国境の島」の

町おこしをめぐる」と題して、対馬アリアン祭の変遷について、日韓交流の変遷との関連から報告があった。

全京秀韓国ソウル大学教授からは「鬱陵島の自然と文化」と題して、鬱陵島で撮影した140枚のスライドを使って、植民地時代の痕跡が残る島の様子が紹介された。

飯倉義之日文研究員からは、「隠岐の河童、日本の河童」町おこしと関連して」と題して、河童に関する豊富な歴史資料や、各地の町おこしの状況の紹介があった。

第3部は、報告者全員が登壇し、筆者が司会で、パネルディスカッションが行われた。まず各報告者から補足があり、小松和彦教授からは、神話研究と関連して、シャーマニズムについて説明があった。また、それぞれの報告者の関心から、今後、隠岐で調査したいテーマが話され、フロアーからも関連情報が提供されるなど、活発なやりとりが行われた。隠岐の参加者の強い関心を感じた。今後の調査研究の協力関係を約束して、フォーラムを盛会に終えることができた。



写真5 白島崎展望台